

術の改善と組合わしていけば10日早生の品種ができたのと同じだということが言われており、今後は品種改良の進行と栽培技術の改善で更に広く利用されていくのではないかと思います。

もう一つの根菜はどうですか、集約度の追求になるとこれほど単位面積当りの生産が高い作物はないわけですから……、やはり労力の点で面倒でしょうか。

金川 浜中で従来の7分の1位（コーン栽培と同程度）の労力で機械栽培が実際に行なわれており、労力的な面では問題がないようですね。

西 草地更新を誘導する作物としてコーンだけでなく根菜も含めて考えていくべきですね。機械の面での省力化も具体化してきているとのことで、収量あまり低くは問題がありますが、家畜ビートで10t以上、ルタバガで7t以上、バラ播き

のかぶでも5t以上取ってゆければよいと思います。

三浦 それではまだお伺いしたいこともたくさんありますが、今日のお話をまとめさせていただきますと、従来は国際的な規模拡大指向型で北海道酪農が進んで来ましたが、第三次近代酪農計画の時代に入ると、更に今度は精鋭主義的といいますか集約度を非常に追求する、一規模からいけばヨーロッパの水準になると思いますが一国際的な中規模程度の集約精鋭主義的な酪農へ転換するのだという考え方の中で、自給飼料については、もっと増産を励行し、良質的なものを確保し、同時に飼料構造も改善し、乳牛の個体あたりの能力の追求も行なう、それらが第三次計画達成のために極めて大事なことでありと結論づけることができると思われま

これからの酪農経営に想う

酪農総合研究所 第1研究部長

遠藤清司

はじめに

よく事業は「人」なりと言われる、私も酪農指導に従事して既に30有余年過ぎたが、酪農経営もやはり「人」によることが大きいことを改めて強く感じさせられている。

これまで多くの酪農家に接してきたが、その中には離農した者もあり、戦後開拓農家から現在素晴らしい酪農経営を樹立した人もあり、畑作から酪農経営に移った人、また反対に酪畑経営から畑専に転換した人などいろいろである。

しかし、これら多くの人達の経営を振りかえってみると、経営が順調に拡大安定した人と、不安定な人とに分けてみると、よい経営をしている人には、農業経営に対する考え方や、やり方にいく

つかの共通点があるし、また、よくない不安定農家には、また農業経営のやり方、考え方にいくつかの共通点を見出すことができるように思う。

もちろん、農業経営は耕地の状況と天候気象の影響を受けることの大きいものではあるが、どうもそれが成功するか否かの絶対条件とはなっていないようである。

以上のようなことを考えながら、私なりに「今後の酪農経営はどうあるべきか」について感想を述べてみることにする。

1 高度経済成長と酪農の現状

高度経済成長は日本の農業を大きく変ぼうさせた。つまり他産業と同じく労働の不足は機械の導入を促し、施設の近代化を齎らした（農業経営の

近代化)。

また農業も従来の生業的見方から企業として考えるようになり、その結果は他産業と同じく、経営の中に経済合理性と労働生産を強く持込んできた。

その結果は従来の多角的経営は後退し、単純化大量生産、専門経営と向かったため、多くの作物は整理され、輪作も組めない状態にまで単純化された(大規模専門経営)。

そのために自給食料としての自家野菜や自家養鶏なども影を消すに至っている(自給思想の低下)

一方農学の発達には水耕栽培など「土」不要の栽培技術までが生まれ、化学肥料の価格が安かったこともあって化学肥料偏重を生み、堆肥軽視の思想が強くなった(輪作の破壊と地力低下を招いた)

しかし、このような地力低下の中であって、作物の収量は、将来はともかくこれまでは相当向上したと言える。

つまり肥料価格が比較的安く安定していたこともあって、多量施肥に支えられ、また農薬の開発と品種改良や栽培技術の改良によって辛うじて地力低下をカバーして収量の向上をみたと言える(多肥と農薬による増収)。

しかしかつては単位収量だけは世界一のものが多かったのに、現在は先進国に遠く及ばないし、今後はさらに格差の開くことが懸念される(将来への不安)。

酪農経営に限ってみると頭数規模の拡大は相当進んだが、1頭当たり乳量では世界一の高泌乳牛であるホルスタインだけでありながら、雑多種類の飼育をしている諸外国に劣るのである。

これは基礎飼料の量的確保が十分でなく、また質的にも劣るといえることができるのではあるまいか(飼育規模と飼料生産基盤の不均衡)。

また経済合理性や労働生産性の向上に名をかりて経営対応以上に飼料構造を単純化したり、省力化の名の下にやるべきことまで手を省く(例えば乳量に応じた配合飼料の適確な給与)など、やれば出来ることまでも省いてこなかったか、このようなことは欧米を見て一層強く感じさせられることである。

また酪農経営は稲作や畑作と異なり、土地を広

く必要とする他、施設と乳牛を揃えなければ生産に至らない、つまり畑作や稲作に比べ資金がきわめて多くかかるということである。

北海道の場合、酪農家の平均負債額は平均生産額からみれば大した問題はないのであるが、平均は中身を表わさないの例えどおり、年間多額の余剰をだしている酪農家もあれば、生産を上回る負債に苦しんでいる人も多い。

しかしこの場合、負債が大きいというよりは、生産を上げれば相当数の農家は黒字に転換出来る可能性があるから、生産の低い農家が多いということもできる。

2 酪農経営の問題点を整理すると

(1) 牧草地の老朽化と質の低下

造成後既に10年以上経過している草地も多く、草地土じょうの硬化、マット形成などがあって収量も低く、質も低下している。このことが乳牛の生産性を停滞させている大きな要因と考えられる。

(2) 経産牛1頭当り乳量の停滞

第二次酪農近代化計画(北海道)の達成率をみても判るように、飼育頭数の達成率は81.1%であるのに対し、乳量生産の達成率は71.8%と低く、しかも本計画の経産牛1頭当たり乳量の計算基礎は4,600kgであることから、きわめて低乳量となっていることが判る。

(3) 生産規模と投資の不均衡

先に述べたように酪農経営は稲作や畑作経営に比べ多額の資金を必要とするものであるから、特に投資は生産と均衡の採れた状態で行なわれなければならないが、生産に対しては過大見積りが多く、経営費に対しては過少に見積った計画をするため、結果として負債に苦しんでいるものが見受けられる。

3 酪農をとりまく現状の認識

安定期を迎えた今後の酪農経営を考えた場合、次の事項を認識しておくことが大切である。

(1) これまでのような飼育規模の拡大は困難であろう。

(2) 乳価もこれまでのような値上げは期待できないであろう。

(3) 常識的には飲用乳をはじめ乳製品の消費はこれまでのようには伸びないであろうことが考えられるが、世界的な200カイリ漁業専管水域指定で魚貝類の供給減少と価格の上昇が考えられるから、不足分について乳肉の消費増が期待される。

また乳製品の輸出国の生産も停滞からむしろ減少傾向にあるので長期展望では外国からの輸入は先細りの方向にあると判断される。

(4) 飼料用穀物の輸入は今後と言えども多少のトラブルはあっても相当期間は安定的に続くであろう。

4 経営確立のための基本的事項

(1) 酪農がすぎになること。

いやいやながらやる仕事は疲労が大きく、能率も上がらないものである。

この点からも酪農をすぎになって頂きたいものである。

いずれの職業でもそうであるが、現在の職業が何よりもすきだという人であっても、はじめからその職業がすきであった人は稀である。

はじめはなんとなくその職業についてやっているが、それが生活をかけておれば当然努力もする。その努力が報いられて興味とよろこびが生じてすぎになるものである。

いずれの人もそれなりに努力はしているであろうが、すぎになるためには、努力が報いられなければならない、そのためには努力の程度と手段方法が問題なのである。

ただがむしゃらに働くだけの努力でも問題はあがるが、働きが少ないのでは問題にならない。

つまり、すぎになるための努力は目標と計画がはっきりしていなければならない、また目標の明確でない労働は疲れやすいものである。

また労働の質も考える必要があろう。つまり労働には他人が仕事を企画して、それを命令指示によってやらされる労働と(他決労働)、自分が企画(計画)をして自らそれを実行する労働(自決労働)とがある。

前者の労働は給料取りの労働であり、後者は農家の皆さん方の労働である。

人間としてどちらの労働が望ましいかと言えば

やはり自主的な自決労働ということができる。

つまり他決労働の場合は強いられる労働であり、自己を殺して我慢もしなければならず、創意と工夫の幅がきわめて少ないものである。

この点からも農業労働をもう一度見直すことで酪農がすぎになることもあるのではないかと。

(2) 計画の樹立と実践とまとめを繰り返す。

生産性の高い農家と低い農家の相違点として、営農計画が樹立されているかどうかということがある。

生産性の高い農家や発展の方向にある農家は、いずれも目標とそれに到達するための計画をもっていると言ってよい。

反対に生産性の低い農家はとかく目標が不明確であり、したがって営農計画がないか、あっても漠然としていて気魄に乏しい。

つまり目標とそれに到達するための計画が明確でないため働くことに張り気が乏しくなり、疲れやすく、能率が上がらないということになる。

したがって、苦勞しながら納得できる営農計画を自分で樹て(他人の樹てた営農計画は駄目)、苦勞してそれを実行し、1年の実績を取りまとめ、検討反省するところに本農家の発展は約束されていると言ってよい。

また実践段階で苦勞が大きくとも、取りまとめの段階で成果に接し、その苦勞がよろこびに転移するものであり、そのよろこびが、翌年の営農計画の樹立と実践への意欲につながって、酪農経営は発展してゆく過程をもっている。

これは何も農業に限ったことではなく、すべての事業に共通していると言ってよいであろう。

(3) 土地に生産を求める原点に還れ。

北海道は昨年久しぶりに冷害に見舞われ約1,000億円の被害額をだした。

しかも従来の冷害と相当様相が異なっており、いろいろな意味で私共は教えられ、反省させられた、つまり従来の被害は地域的に画然と表われることが普通であたっが、昨年の場合はもちろん地域性はあるが、それにもまして個人差が大きく表われたことであつた。

被害の大きかった上川や空知の水稲地域にしても平年作の収量を上げている人もあれば、半作以

下の人もあり、また昨年でも3等の上級米を多量に出荷した人もある。

また畑作の十勝や網走にしても平年作並の収量をあげた人もあれば半俵(10a)しか穫れなかった人もあった。

また同一人であっても圃場が違っただけで大きな差が表われたことも大きな特徴であった。

つまり圃場差が大きかったということである。

以上のような個人差と圃場差が同じ気象条件の下でなぜ生じたかということである。

一般的に作物の収量は天候気象と土地の条件によって80%までがきまると言われるから、天候気象が同じとすれば差の生じた条件は土地と言わざるを得ないのである。

つまり高度経済成長の下で輪作を破壊し、堆肥を軽視し、化学肥料と農薬に依存度を高めて来た農業のやり方について強く反省を求められたような気がする。

しかし人の嫌がる有機質を黙々として土地に還元し、土を愛して来た人達の努力が冷害という条件下で、はじめて力を表わしたと言える。

農業とは土地に生産を求むるのが本義であり、収量をより上げるといふことは、より多くの物を予め土地に与えなければならぬということを実践することである。

5 安定と拡大のための基本技術

当分世界的な不況は続くものと考えれば、酪農経営の技術改善の重点事項は、1頭当たり乳量向上を中心とし、それに関連する技術の集約化ということになる。

しかしそれかと言って規模拡大の有利性がなくなった訳ではないから、経営内容によっては今後共拡大への努力は忘れてはならない。

(1) 1頭当たり乳量向上のための技術改善

1頭当たり乳量の向上は収益性を高める最も効果的な方法である。畜産大学天間教授も1頭当たり乳量を10%上げれば、所得は30%上がり、乳量を20%上げれば所得は60%上がり、30%乳量を上げれば所得は倍になると言っている。

乳量を上げるためには、どのようなことに努力すべきか、要点だけではあるが、次に述べること

にする。

(ア) 基礎飼料を腹一杯食わせること。

具体的に述べる余裕はないが、とにかく基礎飼料の絶対量が不足していることが多い。質の向上を計って腹一杯食わせることである。

基礎飼料を十分給与せず、配合飼料に依存することは配合飼料の効率を低下させることになり、同じ乳量をだしても儲けは少なくなる。

そのためには、牧草単一の飼料構造を極力さけ、牧草地の更新を含めてコーン、根菜なども可能な限り導入し、飼料構造をもう少し複雑化することも考える必要がある(従来は単純化が強調され過ぎた)。

(イ) 配合飼料の適正な給与

多頭飼育に名をかりて、近年配合飼料を一律給与する者が増えている。

穀類の比較的安い諸外国であっても、どのようにして配合飼料を乳量や分娩後の月数に応じて給与するかで苦勞している。

配合飼料は基礎飼料に比べてやはり割高なものであることを心にとどめておくことが大切である。

これを効果的に給与するためには、与えねばならぬ牛にはそれなりに多く与え、与えなくともよい牛にはそれなりに少なくしてこそ、乳も効率的に出し、したがって飼料効率は高くなる。

しかし原則としては不足しないよう積極的に給与して泌乳量を高めてこそ儲けにつながるのである。

(ウ) 放牧技術の改善を計る。

一般に牧区数が少ない。輪換放牧を適正にやるためには、北海道でも7~8牧区は必要である。

また牛は1日中放牧するよりも時間を区切って放牧した方が採食量は多い。

したがって出来ることなら輪換方式で時間を制限した時間制限放牧の方が草を傷めず、採食量が多くなり泌乳量も向上する。

また近頃の草地は放牧地であってもマメ科率が低い、もう少しマメ科率を高めることが、泌乳性からも、また乳牛の起立不能症の予防のためにも望ましいことである。(但し鼓腸症に注意)

(エ) 分娩間隔の適正

分娩間隔が長いために平均1日乳量、年間1頭当たり乳量を低くしている例が多い。

日常の飼養管理を周到にして、発情の早期発見と適期授精につとめ分娩間隔の適正を計る必要がある。

(a) 病気の子防と廃用の防止

乳房炎など直接泌乳量に関係する病気はもちろんであるが、起立不能症など高泌乳期の発病は経済的損失が大きい。

日常注意深い管理によって、これらの病気の子防と早期発見、早期治療につとめ出来るだけ損害を少なくする必要がある。

(b) 乳牛の資質改良にも関心をもて

品種改良は近年急激に進み、体型など一変したが、それでも泌乳性においてのバラツキはきわめて大きい。

種雄牛の選択はもちろんであるが、更新とう汰にも関心を払い、質のよいものを揃える心構えが要求される。

(2) 投資と生産の均衡

酪農経営は他の稲作や畑作経営に比べ本質的に資金を多く必要とすることは前にも述べた。

そのために一般的には負債額は大きくなっているが、必ずしも全部ではなく、少ない農家もあれば、多い農家であっても生産がそれを上回っていて、結構黒字経営となっているものもある。

しかし他の経営に比べれば経営収支の不均衡が目立ち、赤字農家の率も高い。

その理由は酪農経営の生産構造が、他の経営に比べ複雑であり、それだけ緻密な営農計画と強力な実践力が必要であることを物語っているとも言える。

多くの事例をみれば判るが、よい事例の場合ほとんどのものが、営農計画を樹て、年次収支を明らかにして資金返済の見通しをつけてやっている。大きな経営になればなるほど、計画性が大切であって、負債が大きく赤字経営になるのは「めくら」で経営を続けているところにあると言える。

面倒臭く、労力と時間はかかるが、営農計画を樹て、資金の返済計画まで考えてみるのが、投資と生産の不均衡を防止し、赤字経営から脱却す

る道なのである。

あとがき

酪農経営ばかりでなく、農業経営を考える場合第一に考えなければならないことは、土地条件であり気象条件との対応であるが、このことについては当然考えなければならないものとして今回は省略した。

また都市近郊酪農など各種粕類の利用経営やそ菜園芸との協業経営なども今回は割愛させて頂き、専ら一般的な経営上の問題と改善対策と、その基本をなす心構えについてのみ述べたのでご諒解されたい。

札幌副都心商業センター

「サンピアザ」への フラワーショップ開店のご案内

人口増加のいちぢるしい札幌市では、旧市内への過密化の構造をかえるため、白石区厚別副都心計画がたてられ、着々開発が進められております。将来、地下鉄東西線の乗入れ、公共施設が計画され、札幌研究農場のある上野幌地区、江別市の大麻団地、広島町の西の里団地など広大な地区を背景に発展が約束されています。現在その核心として、新札幌駅前に商業センター「サンピアザ」が6月10日オープンいたします。

この度、各方面からの要請にこたえ、「サンピアザ」の一角に、園芸専門コーナーを開店いたしました。店名を「フラワーショップ雪印種苗」といたしました。鉢物、切花、種子、各種園芸資材を中心に、地区の皆様に対して、緑のある豊かなくらしへのサービスと、会社企業の一般に対する宣伝拠点として、努力いたしたいと存じます。皆様の御支援、御意見をいただき、愛される店舗へ育ててゆきたいと思っておりますので、よろしく御願いたします。(園芸部)